



楓の森アップデート3



合志市立合志楓の森小学校
学校だより 第19号
令和8年1月27日(火)
文責:校長 佐藤 政臣

○校訓「志高く 道を拓く」

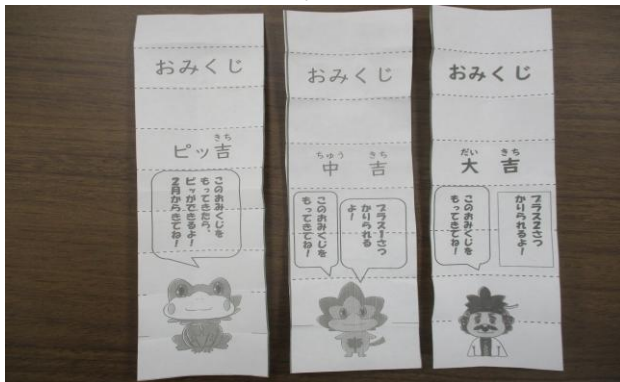
○学校教育目標「夢を持ち 自ら考え よりよく行動できる児童の育成」

「やったー！大吉だー！ 図書室でおみくじ？」

図書室に入りますと、おみくじが……。図書室が神社になっていました。



毎年恒例の「図書室おみくじ」です。本を借りた人は、1回だけおみくじをひけます。おみくじをひろげると～。



○大吉…プラス2冊借りられます。
○中吉…プラス1冊借りられます。
○ピツ吉…「ピツ！」ができます。

子どもたちにたくさんの本を読んでもらうために、学校司書の堀田郁代先生、図書館教育担当の関野篤子先生、図書委員会の子どもたちが、試行錯誤しながら、読書活動の推進に取り組んでいます。

学校評価アンケートの「進んで本を読んでいる」の項目は、肯定率が68.7%でした。今後も様々な取組をしていくことで、読書好きの子どもを増やしていきたいと思います。

知的戦闘力を高める ための読書

本を読む子どもを育てたい、というのであれば、私たち大人も読書をする姿勢を見せなければならぬでしょう。最近、どのような本を読まれたか。私は、ジャンルを固定しないで興味があるものを読んでいます。例えば、ビジネス系で言え

ば、山口周さんが書かれた本をよく読みます。その一冊である「知的戦闘力を高める 独学の技法（日経ビジネス人文庫）」では、コミュニケーションスキルについても触れられています。国際化がますます進むこれからの世の中は、外国人とコミュニケーションをとりながら、様々な業務を進めていくことになります。そこで、学校教育においても、国際理解教育に取り組んだり、自分の意図や感情を正しく伝え、相手の意見も理解し、双方向で意思疎通を図ったりすることができるコミュニケーションスキルの向上を目指した教育にも取り組んでいるのです。

山口さんは、本書で「リベラルアーツ（教養教育）が、コミュニケーションを円滑にするための武器になる」という体験談を次のように語っています。

～ロンドンの同僚とクライアントのやりとり～

同僚「彼は、どういうタイプのリーダーですか？」

クライアント「彼かい？リア王だね」

同僚「なるほど。ではドマドは？」

クライアント「S氏だ」

同僚「やっぱりそうですか…ではコデリアは？」

クライアント「去年までいたN氏だが、S氏に放逐された」

同僚「ああ、では我々がコデリアになる必要がありますね」

クライアント「なるほど。それはそうだな…」

上記の会話は言うまでもなく、シェークスピアの戯曲「リア王」を題材にしています。この戯曲においてリア王は、腹黒い娘2人の意図を見抜けずに寵愛して国をゆずる一方で、真の愛からリア王に苦言を呈するコデリアを疎んじて追放してしまいます。

上記の会話は、その人間模様をたとえとして用いているものですが、リア王の筋書きをまったく知らない人にとっては意味不明でしょう。欧州人にとっては、知的産業に従事しているのであれば「リア王」くらいは読んでいて当然だという前提で世界中のエリートは議論を組み立ててくるというお話です。グローバルなコミュニケーションが必要となる場で、「リア王」を知らないというのは、日本において仕事をする際に「忠臣蔵」のたとえを出されてもわからない、というくらいコミュニケーションロスになるということです。

このようなことから、これから国際社会で仕事をしていく子どもたちには、教養としての読書が不可欠であるといえるでしょう。